

日刊 動労千葉

88.1.1
No.2731

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六（公衆）〇四七二（二）七二〇七

闘春

国鉄千葉動力車労働組合

執行委員長 中野 洋



満を持して反撃にたとう

昨年、国鉄分割・民営化の強行による国鉄労働運動の解体に失敗した中曽根自民党政府は、四・一以降も、全力を投入し、革マル松崎と手を組んでまでも、この最大の目的を達成するために、あらゆる限りの攻撃を加えてきた。

しかし、十万人首切り攻撃の嵐にたえぬいた国鉄労働者は、闘いの旗を高く掲げたまま年を越してしまつたのである。

一九八七年が、後の歴史に、時の支配者がかくも理不尽な圧政を国鉄労働者に強いた年として記録されるとするならば、一九八八年は、国鉄労働者の新たな反撃の開始の年として記録されなければならぬ。

国鉄問題は何ひとつ

解決していない

事実、「国鉄問題」は何ひとつ解決されていない。累積債務問題はどうか。清算事業団は二兆円近い利払いのためにサラ金地獄におちいつてしまつているではないか。整備新幹線計画の強行を見よ。政治的利権構造は何ひとつ変っていないではないか。「一企業一組合」の夢想はどうなったのか。鉄道労連の内部抗争は、革マル松崎に対する憎悪の声をますます激しくなるばかりではないか。そして何よりも、動労千葉―総連合がその勇姿を堅持し、国労四万名もの戦闘的国鉄労働者がその旗を守りぬいているのである。

しかも、執ような組合潰しのみを最優先する労務政策が、鉄道事業の使命たる「安全」をも重大な危機におとし入れているのである。

闘いの第一ラウンドへ

これが、「四・一分割・民営化体制」の実体である。これが飾りたてられた新生JRの真の姿である。とすれば、われわれには、闘いの道を貫く以外にいくかなる選択の道があるというのか。

何よりも、われわれにとっては、分割民営化反対闘争は何ひとつ終っていないのだ。不当解雇された仲間たち、清算事業団に送られた仲間たち、強制配転された仲間たちが不屈に闘いつづけている。

「ひとりの首切りも許すな、原職奪還！」はわれわれの闘いの原点である。

一九八八年、動労千葉は、今までもまさる決意をこめて、闘いの第二ラウンドに突入する。

激動の情勢を闘いぬく力を

われわれをとりまく情勢もまた、全く新たな事態のなかに突入している。昨年十月の株価大暴落は、このことを衝撃的に明らかにした。これは、資本主義の末期症状の露呈であり、一九二九年大恐慌の再来である。世界は今後数年間にわたって、重大な激動、戦争に行きつかざるを得ない重大な危機のなかに突入した。今までの価値感が否応なく全て覆えされる、そのような情勢の到来である。逆に言えば、労働者階級の真の力がためされようとしているのである。国鉄労働者に

階級的労働運動路線を堅持しよう

情勢の激動とビッターリ符号した全労連の結成は、明らかに新たな産業報国会の組織化のはじまりである。「全労連路線か、階級的・戦闘的労働運動路線の堅持か」このことが問われているのである。

国鉄分割・民営化攻撃に対し、唯一ストライキを撃ちぬいた動労千葉の存在が力を発揮するチャンスである。また、どんなに厳しくとも、三里塚闘争との連帯・労農連帯路線を貫いてきたその成果が力を発揮するときである。動労革マル・鉄道労連との闘いのなかでできたえぬかれた団結力が力を発揮するときである。

勝利の年を進撃しよう

この数年間の国鉄分割・民営化攻撃は、敵の意図とは逆に、国家権力というものの本質、それがいかに労働者階級とは相入れぬ「組織された暴力」であるのかを、われわれにいやというほど教えてしまった。また、闘うことのすばらしさ、裏切る者のみにくさをわれわれの脳裏に焼きつけてしまったのである。われわれは、この教訓を存分に生かして、ますます戦列をきたえあげ、一九八八年を勝利の年にするであろう。全組合員・家族が一丸となり、全国の仲間と固いスクラムを組んで、勝利の年を進撃しよう。

一九八八年一月一日

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！